

覚書

清州佐伯村お民元書 (十一)

第十次佐伯開拓國小史

会員 矢野 徳 弥

入植 第四年度

一 概 要

敗色覆い難い苛烈な戦局の中で、母国日本は、昭和十
九年の暮を迎えた。しかし、入植第四年に入る清州佐伯
村は、意外と明るくあつた。

そして、皮肉にも、康徳十一年といふこの年は、日露
の衰退とは全くうらみらば、佐伯村にとっては、その衰
没の全期間を通じて、最も活気に満ち、かつ前進した年
となつたのである。

歴史のズレを思わせる一年であつた。

この年、最大の出来事は、入植以来始めての、五十二
戸、二百四十九名といふ大規模な本隊の入国である。こ
れは既に入植している者の、約半分に当る数字である。

このため団の区域は大きく東北方に拡大され、新しく六
十軒歩を越える水田が開かれ、三百軒歩に達する畑が団
員達の所有となり、村造りは、更に大きな前進を遂げる
こととなる。

そして、これに拍車をかける如く、在滿大分県報國農
場の域内設置が行われ、百名の青年男女が佐伯村の地
区に入り、米穀増産に挺身することになつた。

こうして団内の人口はわかに増大し、その中核とな
る若者達の熱気が、村づくりに一段と力を貸し、米食
糧増産に役立ったのである。

そしてその裏に、食糧確保に對する関東軍側の、異例
の配慮があつたことも見逃がせない。ことしはなつて、
内南洋が早く失われ、六月にはサイパン島が陥落して、
本土空襲が始まるという、緊迫した情勢となつたが、開
拓地には、なお多数の兵使適格者が温存され、この年の
団員の志名者も数倍にとどまり、現役壯丁も十三名中、
二名が年内に入隊したのみであつた。

二 新團員の入植

太平洋戦争の前途は、憂色を濃くした昭和十九年四
月、佐伯村始まつて以来、最も大分がかりな本隊が編成さ
れ、四月二十日、大分駅前で、坂田県政部長の激励を
受けた後、同駅から乗車、濱崎の途ついた。

一行は五十二戸、家族を含め総勢二百四十九名で、稗
田基三(團長)が隊長であつた。その前哨別隊は、次
の通りである。

- 團長村 二一、 明治村 八、 佐伯市 五、
- 小野市村 五、 川原木村 四、 中野村 三、
- 重岡村 二、 清江町 一、 名護産村 一、
- 下野田村 二、

なお一行の中には、本隊の受入れに伴う学童の増加に
対応すべく、新たに國民学校教師として赴任する院玉紳
雄と、團長の家族として入国する、獣医の矢野徳彌(筆
者)が含まれてゐた。

ところで、昭和十七年、十八年と本隊の送出が不振で
あつた後、戦争の前途も予断を許されなくなつたこの時
期に、どうしてこのような多数の志名者が出たのである

うか。

その理由の一つとして、前年九月、県下を襲った集中豪雨による、有史以来といわれる災害のことに触れる必要がある。

当時の被災者達の話や、佐伯市史に記載された内容などを総合すると、

昭和十八年九月二十日、あまり大型でない一つの台風が県下を襲った。台風は日向灘を北上し、この朝、四国の足摺岬付近に上陸し、四国・中国を縦断して、ほどなく鳥取付近から日本海に抜けた。大分県からすれば東岸のコースをとったため、風による被害はさして見られなかったが、県の南部山岳地帯に、十八、十九、二十日の三日間に、九〇〇ミリという大量の雨をまとらした。今日の気象知識からすれば、台風の接近に伴ない、南東の方向から、大量の雨を伴った風が吹き込み、たまたま県下に停滞していた前線が刺激して、県南山岳地帯に、局地的に集中豪雨を発生させた。——ということであつたらう。

このため、戦時の乱戦により保水力を失った山間部でいたるところに山崩れが起り、大きな被害を出した。中でも番匠川本流地域に、潰滅的な被害を招いたのは、因尾村山部の大畑野に発生した山崩れで、一たんは上流の峡谷をせき止めて、大量の泥水をプールし、やがて支えきれなくなり自潰して、一気に土砂もろとも下流に突っ走ったため、因尾地域の田畑を瞬時に埋め、そのまま下流の中野・上野・切畑・鶴岡などの耕地を潰し、あるいは家を流し、更には十数名の尊い人命をも奪う大災害となつたのである。

災害の原発地であつたため、因尾地域の被害は殊更に激甚で、その復旧はとうてい望むべくもなく、大挙して

満州佐伯村への移住を決議させる、大きな原因ともなつたのである。

そして、その他の事由で参加を申し出た人達の中には、徴用忌避によると見られる者も、また少なからずいたようである。

昭和十八年の後半から、戦局の重大化に伴ない、戦争業務の遂行や、国民食糧の確保に必要とされる一部の要員を除き、兵役に遠い成年男子は、ことごとく国民徴用令の対象となり、軍隊同様、一片の令状により次々に徴用されて、ある者は国内の軍需工場に送られ、ある者は外地に送られて陣地構築や、飛行場の設置に従事させられるようになった。そして、中には運悪く敵の反攻に出逢い、重と運命を共にする者も出ていたのである。このため人々の徴用に対する恐れは日々に高まり、何とかしてこの難を逃れたいと、満州農業移民に加わるといふ者が出たのである。とくに転落業と命懸けなくされた商工業者に、この傾向が強かつたといえる。

しかし、これらの人達は、後にかかりの苦勞を強いられることになる。

ところで、この本隊は、体の不自由な老人から、哺乳ビンを手放せない幼児まで含む大集団であつたため、その輸送は、大変な難事となり、汽車が朝鮮を北上する途中、柳井佐太郎の父吉蔵が、汽車から転落死するなどの事件があり、思わぬ時間を費して、二十三日の午前十時頃、昌國駅に到着した。

駅には辯事延主任の高野繁と、数名の団員の迎えに出ているが、なぜか、本部からの輸送責任者が見えていなかった。

そして、これから団に入る途中で、ちよつとした事件が発生したのである。少し細かい記述になるが、農業移

民の暗い運命を思わせるような出来ごとでおつたと思えてならず、歎草なぐる書きとめておく。

一行が下幸すると、そこには六十台ばかりの大車が準備されていた。それは自立した苗買達の所有するもので、御者は、それぞれ苗買に雇われている満人の農夫であつた。

ここぞ手廻り品を掛け持ち、一台に四、五名づつ乗車するようには指示されたが、乗車準備に手間どつて、一行が出発したのは午後一時を過ぎた頃であつた。何しろ五十キロの道程である。昌留保城までは延々と一列になつて走つたものの、途中で用費をせたり、馬を休ませたりするうちに、次第に先頭と後尾の間に大きく開き、やがて三台、五台とバラバラになり、空力鎮を通過する頃には、日ほとつぷりと暮れ、四月下旬とはいへ、蒙古かみくる冷たい風が吹きつけ、非常な難儀な旅行となつた。そして満人の部族に近づくと、野犬の鳴き声がしきりと聞こえ、車上の人の不安を一そうかき立てるであつた。何しろ御者と苗言葉が通じないのである。荒涼たる高粱畑の暗い夜道を、そそいも知らぬ土民に任せて、左に奥地へ集地へと走るばかりであつた。

すでに六時間以上も走つていて、どこを走っているやら、いつ行き着くのやら全く見当もつかず、泣き出す子供もあり、うなる言葉もあり、一行の心の中にも、輸送指揮者も出さぬ目の無責任さに、激しい怒りが収められ、じめていた。

空力鎮を出て間もなく、大車は開拓道路を離れて間道に入つた。そして一時間も走つた頃、突然、前方の車の列から、泣き叫ぶ女の声と、怒り狂う男の声が聞こえてきた。少し遅れて現場に到着した教節の兒玉紳蔵が近づいて見ると、一台の大車が路側の溝に転落し、女、子

供教節が棚に放り出されて倒れていた。

幸いけがは然かつたものの、これがきっかけで、苗の本部に対する憤りが一挙に噴き出した。そのうち誰がつけたのか、燃料用に使つた薪の山に火が入り、巨大な火が、罵声と怒聲の音の中で、天を焦すかの如く燃える中で、抗議の集会が始められた。「このままで殺されてしまふ」「すくなくも内地に引き返そう」など、意見が飛び出し、まさに暴動の怒濤しか収まらない勢いであつた。

転倒した車の家族が、世よ外から参加した乗業者の一人であつたため、ことさら事態を悪くしたのである。心配した兒玉は、ポケットにあつた「日満会話の手引」を出して、筆談と手真似で満人の御者に聞いて見ると、本部はもうすぐそこで、三井も離れていないという。

直ちに本部に使いを出すことにしたが、本部側も、夕食や宿舎の準備をして、本隊の到着を待っていたところ、突然、苗の乗の入口付近で火の手が揚つたため、何らかの異変が起つたに違いないと、急ぎ守水指導員を派遣することにした。そして指導員が駆けつけて見ると、この騒ぎである。

守水指導員は、当然、本部側の不評をわびるものと一同は考えていた。ところが前に出た守水指導員は、然る態度で一同を叱責するのであつた。

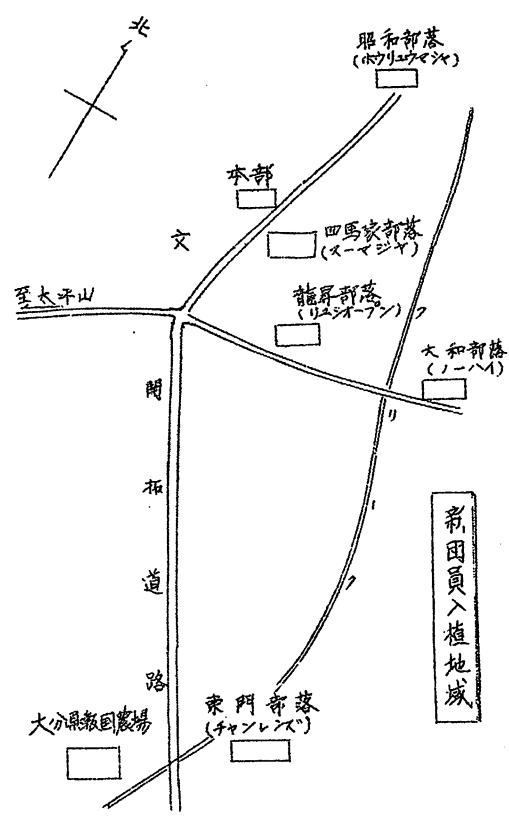
「家族を連れてここまでやってきて、男が何たる泣きごとをいうか。そんな甘々なるい精神で、満州開拓がつとまると思ふか。降りたい者はさっさと内地に帰れ。大車はいまから本部に向かう。入団するものだけ、車に乗れ、ついて来い。」と、それは大した剣幕であつた。

そのうち高粱畑の火も下火となり、三台、五台と大車が動きはじめ、まもなく全部の車が本部方向へと進んで

行った。宛玉は最後尾の車に乗って出発した。
 先頭の車が本部に到着したのは午後復元時で、最後の車
 が着いて門を閉じたのは、すでに午後十一時をまわって
 いた。
 その夜、團長は新京に出張中で、出納指導員が指揮を
 とっていた。

三 新団員の生活

団では、この年の入植者を、新団員と呼んだ。
 新団員の構成は、さきにも記したとおり、極めて複雑
 であった。災害で失った営農の基盤を、満州の新天地に
 再構築しようとする者、徴用を恐れて、開拓村に難を避
 けようとする者、老いてなお生活の道を探す者、兵役前
 に一家の独立を志す者、人それぞれに思惑を秘めての入
 団である。受入側の心労も並み大抵のものでなかったが、
 一応、新団員は次のように配置された。



先ず入植前に事務経験を持つ東 雅勝 (佐伯市) は書記と
 して、徴兵道員となり自立の後が心配される俣田高純・
 川野富貴雄 (ともに尾尾村) の兩名は、團長預かりの勤務員
 として、また、健康に難があると思われる花井一治 (看護
 屋村) は用務員として、それぞれ本部に残されることにな
 った。

そして、新団員の五分の二を占める尾尾村出身者の大
 部分は、俣田甚三・吉良 命等を中心にして大和部落 (豊海)
 に入り、一部は、柳井佐太郎・今山水男達と共に、龍昇
 部落 (リウセイブツ) に入った。また、河原 定・河原 茂
 の兩名は、豊原部落 (トヨハラ) に新設された精米所の責
 任者となったが、その撤去一式は、村を離れるとき、尾
 尾村長が餞別として、一行に贈ったものであった。

次に、岩瀬兵庫・矢野 努などの明治村出身者、赤矢
 新太郎・深矢照幸などの小野市村出身者、蒲江新出身の
 阿部吉之助などは、新しく、団本部の徴方に準備された
 昭和部落 (セワカブツ) に入り、長沢喜三郎・小野宇作など
 中野村出身者は、本部に近い四馬家部落に入ったが、小
 野宇作はまもなく脱落して離団した。

この外、既植の団員と、親子・兄弟等の関係にある者
 は、身分を預ける形で、その周辺に配し、自立の援助を
 させた。

こうして新団員の多くは、団の北部及び東部の部落に
 配置されて、初年度のグループ経営に入ったが、多くの
 先輩達に通った道とはいえ、その生活は決して生易しい
 ものではないが、

新団員の一人、柳井佐太郎の話をまず聞いてみよう。
 「あれは、戦時中団長の江平にいて、屋形で炭焼きを
 していたが、十八年の水害で、田畑も家屋敷も全部流さ
 れてしまった。途方に暮れているとこゝろに、佐伯村に行

っている清田光之が帰って来て、「儼々とこゝろに來ぬか」という。微服のことも氣になるし、どうしようかと迷っているところ、中野村の村長をして、大坂野田長も帰って来て、熱心に奨めるので、とうとう満州に行くことに決めた。

親父達は、あとで迎えに帰ると言つたが、一緒がいいというので同行した。ところが朝鮮のジヤクボクというところ、汽車から落ちて死んでしまつた。このとき親父は八十で、おしは四十一じやつた。旅の途中の出来事で悲しんでばかりもおれん。おしは、やるぞと心に誓つた。

團に入る稗田(甚)達は、清田のいる萱海(カハイ)に行き、おし達五人は龍昇に落ちついた。

ここは本郡から開拓道路を一キロ位下つたところ、グリーク一つと越すと萱海(ミカハ)の邊で、後の方には馬家(ウマノカ)があり(カキヨシ)、右手の方には昭和部落が見えた。おしは啼声(ナゲレ)が聞こえるほどの距離(ニキリ)だった。

新團員の担当は、守永先生(シヱノウ)だつたが、まずやることは、秋から先自治できる食糧(イヌ)を作れということだ。九人の家族を抱えるおしは、並大ていの苦勞(クワウ)じゃ成功せぬぞと考へていた。しかし、共同經營(キョウコウ)はなかなか難かしいもので、おしは飯(イ)の盛り方、火(ヒ)の働き(カシ)の良し悪し(カシ)の便(ベ)日數(ニツスウ)、労働(ロウコウ)の精度(セイド)など、まで悉く問題(イシ)になり、二ヶ月も経たぬうちに、とうとうグループを解散(クサン)してしまつた。本部(本部)は怒つて、經營資金(ケイコウ)の貸出しを停止すると、圧力(アツリ)をかけてきたが、「資金(ケイコウ)の面倒(マド)は一切受けません」と一札(シツ)を入れ、ようやく離脱(リダツ)を認め(カケ)てもらつた。

これから、一本立ち(イツポン)の苦勞(クワウ)が始まつた。配分(ハイブン)された一町三反(イツチヨウサンハン)の開田(カイテン)予定地(ヨウイテイチ)に行つてみると、親指(オシササ)ほどの太さのヨモギ(ヨモギ)が一面(イツメン)に群生(グンセイ)していて、とても田(イデ)になるかと心配(シネイ)した。

が、考へて見れば、それだけ地方(チホウ)のある種(タネ)でもある。毎日(メイニチ)毎日(メイニチ)一生懸命(イツシヨウケンメイ)に、ヨモギ(ヨモギ)を取り除(ノ)いた。そして、いざ(イザ)通水(ツウスイ)という段(タン)になつて、そこ(そこ)が実は水踏(ミヅフミ)の水函(ミヅツツ)から三寸(サンセン)も高いことが分(ワ)つたのである。

植付(ウエ)の時期(ジキ)は切迫(キツパツ)しているし、一体(イツタイ)どうしてよいかわ(ワ)りなく、團長(ダンチョウ)は泣(ナ)きついたり、いま更(イマモウ)に、田(イデ)はどうにもならぬからと、報國(ホククニ)農場(ジョウ)の一角(イツカク)を、職權(シヨクケン)で分与(ブンヨ)してくれ。全く有難(アリガタ)かつた。

おしはここで、半分(ハーフ)はバラ播(ハ)きし、半分(ハーフ)は田植網(イデウヅメ)を引(ヒ)いて、赤い玉(アカイタマ)に合(あ)わせて、糞(コ)を下(くだ)して行(い)つた。家族(カザク)総(ソウ)かりであつた。

このおと、除草(ジョソウ)が大変(ダイベン)なつた。油断(ユダツ)をして、稗(ヒ)と藪(ヤブ)に圧倒(アツタウ)されてしまふ。何(なに)しろニ番草(ニバンクサ)の終(ハ)らぬうちに、穂(ホ)が出(で)るようになるんじやけん。とばかり、死(シ)にもの狂(くる)いで頑張(ガマン)つたものだ。

その甲斐(カヒ)あつたか、秋(アキ)には穀(コ)を四十八石(シヨウハチイシ)取り上げた。一先(イツケン)遣隊(センダイ)より上(ウ)じや」と團長(ダンチョウ)から褒(ほ)められたとき、これ(これ)で満州(マンシュウ)にきてよかつた」と、おしはじめて思(おも)つた。しかし、無理(ムリ)がたつたのか、十月(ジュウグツ)十二日(ニジュニニチ)、婆(バ)さんが死(シ)に、四日(ヨウジツ)もたれず、また子供(コドモ)一人(ヒト)が死(シ)んだ。子供(コドモ)というてんもう十四(ジュウシヨウ)歳(サイ)じやつた。そして隣(トナリ)りの水(みづ)さん方も二人(フタヒト)死(シ)に、孫(まご)作(タク)さん方も二人(フタヒト)死(シ)んだ。新團員(シンダンイン)の家(イ)では死人(シニジン)が多(オホ)かつたのう。一筆(イツヒツ)書(カキ)の家(イ)に残(ノ)されて、團員(ダンイン)達の過去(カクオ)帳簿(チャウボ)を見(ミ)ると、三十名(サンジュウメイ)が、この年(トシ)七(ナナ)くなくなつて、その大部(オホク)分(ブン)は、新團員(シンダンイン)の家族(カザク)で、老人(ロウジン)と子供(コドモ)の多い(オホイ)のか心を痛(いた)める。(つづく)